A detailed topographic map of the Aomori City area, showing contour lines, roads, and urban areas. The map is oriented vertically, with the city center at the bottom and the surrounding hills and mountains above. The text is overlaid on the map.

青森市埋蔵文化財調査報告書 第76集

栄山(3)遺跡

発掘調査報告書

平成16年度

青森市教育委員会

青森市埋蔵文化財調査報告書 第76集

栄山(3)遺跡

発掘調査報告書

平成16年度

青森市教育委員会

正誤表

頁	行	誤	正
序	1行目	306ヶ所	307ヶ所
5頁	7行目	深さ35cm	深さ49cm
5頁	23行目	深さ45cm	深さ15cm
15頁	第10図	2 SK-05	2 SK-03
20頁	写真3	第9図7	第10図3

序

青森市内には平成16年2月28日現在で306ヶ所の遺跡が所在しており、これまで公共事業や民間開発事業等に伴う発掘調査が数多く実施されてきております。

栄山(3)遺跡は、平成11年度に東北縦貫自動車道建設に伴い青森県埋蔵文化財調査センターにより発掘調査がなされ、本年度には本書の三協運輸株式会社の水路付け替工事に伴う発掘調査、また国庫補助事業での個人による進入路造成に伴う発掘調査が実施されております。

本遺跡は、この度の発掘調査や県埋蔵文化財調査センターの発掘調査成果により、縄文前期から縄文後期まで断続的に使用され、平安時代には竪穴住居跡や土坑、焼土遺構などから構成される集落が営まれていたことが明らかとなりました。

本書が今後の埋蔵文化財の保護並びに活用に役立つことができれば幸いと存じます。

最後に本書を刊行するにあたり調査委託者であります三協運輸株式会社をはじめ、関係諸機関および関係各位のご理解・ご協力に対しまして、厚くお礼申し上げます。

平成17年3月

青森市教育委員会

教育長 角田 詮二郎

例 言

1. 本書は、青森市大字細越字栄山に所在する栄山(3)遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本遺跡の一部は、東北縦貫自動車道八戸線建設事業に先立ち、平成11年度に青森県埋蔵文化財調査センターにより発掘調査が実施され、本年度は当委員会により民間会社および個人による造成工事に伴う発掘調査が実施されている。
3. 本年度の発掘調査に際しては、民間開発に伴う事業者経費負担区域を便宜上「原因者負担区」、個人開発に伴う調査区を「国庫補助事業区」と称して実施した。
本報告書は、原因者負担区の調査成果をまとめたものである。なお、国庫補助事業区の報告書は、本年度刊行の「市内遺跡発掘調査報告書13」青森市埋蔵文化財調査報告書第79集に所収している。
4. 今回の発掘調査(原因者負担区)は、水路付替え工事に伴うもので三協運輸株式会社の委託を受け実施した。
5. 本報告書の主な執筆及び編集は、青森市埋蔵文化財調査員 一町田 工が担当し、第Ⅰ・Ⅱ章については文化財主事 児玉大成が担当した。
6. 石質の鑑定については、青森県総合学校教育センター指導主事 工藤一彌氏に依頼した。
7. 本報告書の土層の注記については、新版標準土色帖(小山正忠・竹原秀雄1993)に準拠した。
8. 挿図の縮尺は各図に示した。また、方位については真北を示した。
9. 出土遺物及び記録図面ならびに写真関係等の資料は、現在、青森市教育委員会が保管している。
10. 図中、表中で使用した遺構の略称は以下のとおりである。
土坑→SK○○○、小ピット→SP○○○、焼土遺構→SF○○○、焼土遺構内の土坑→SF○○○-sk○○○、
焼土遺構内の小ピット→SF○○○-pit○○○、国庫補助事業区の土坑→国補SK○○○
11. 発掘調査ならびに本報告書作成にあたっては、調査委託者である三協運輸株式会社をはじめ、次の機関・諸氏にご指導・ご教示・ご協力を賜った。ここに深く感謝の意を表する次第である。(敬称略)

文化庁・青森県教育庁文化財保護課・青森県埋蔵文化財調査センター・青森県立郷土館・木村房雄・
工藤清泰・工藤 大・白鳥文雄・鈴木克彦・成田滋彦・畠山 昇・三浦圭介・三宅徹也

目 次

序 例言 目次

第 I 章	調査の概要	1
第 1 節	調査に至る経緯	1
第 2 節	調査要項	1
第 3 節	調査方法	2
第 4 節	調査経過	3
第 5 節	遺跡の環境	3
第 II 章	検出遺構	5
第 1 節	土坑	5
第 2 節	小ピット	8
第 3 節	焼土遺構	10
第 III 章	出土遺物	12
第 1 節	縄文土器	12
第 2 節	土師器・須恵器	12
第 3 節	土製品	12
第 4 節	石器	12
第 5 節	鉄製品	15
まとめ		17
写真図版		18
報告書抄録、引用・参考文献		

図 版 目 次

第 1 図	遺跡の位置および調査区位置図	
第 2 図	グリッド配置図および基本層序	3
第 3 図	遺構配置図	4
第 4 図	土坑 (SK-01)	6
第 5 図	土坑 (SK-02~04)	7
第 6 図	小ピット (SP-01~06)	9
第 7 図	焼土遺構 (SF-01)	11
第 8 図	縄文土器	13
第 9 図	土師器・須恵器	14
第 10 図	土製品・石器・鉄製品	15

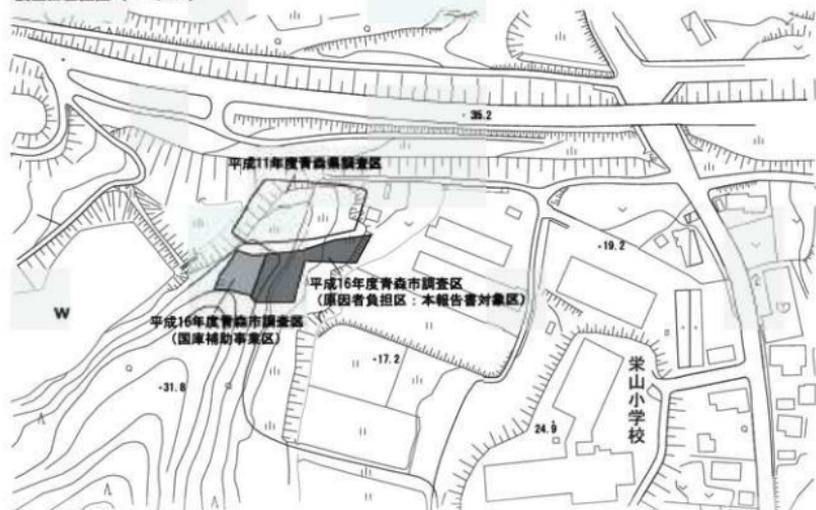
表 目 次

第 1 表	土坑属性表	6
第 2 表	小ピット属性表	8
第 3 表	焼土遺構属性表	10
第 4 表	出土土器属性表 (1)	14
第 5 表	出土土器属性表 (2)	16
第 6 表	出土土製品属性表	16
第 7 表	出土石器属性表	16
第 8 表	出土鉄製品属性表	16

遺跡位置図 (1 : 25,000)



調査区位置図 (1 : 2,500)



第1図 遺跡及び調査区位置図

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

平成16年3月12日、青森市教育委員会文化財課（以下、当委員会）に青森市細越字栄山の駐車場造成に係る「埋蔵文化財（遺跡）等協議書」が三協運輸株式会社より提出された。埋蔵文化財包蔵地の位置関係を照会した結果、開発予定地が細越館遺跡（青森県遺跡台帳番号066）および栄山(3)遺跡（青森県遺跡台帳番号213）に該当していることが明らかとなった。

また、平成16年度になり同計画地における不動産取引に鑑み、青森市建築指導課より土地売買等届出書（国土利用計画法第23条第1項に基づく）に対する意見照会を売買取引地ごとに何度か求められた。その間、開発計画と埋蔵文化財の取扱いについて三協運輸と協議し、平成16年5月20日に発掘調査の要否を目的とした試掘調査を実施した。試掘調査は、開発予定地（16,377㎡）のうち、試掘可能な区域を対象に東側の細越館遺跡40㎡、西側の栄山(3)遺跡25㎡に対し、重機による掘削及び必要に応じて鉤簾がけを行った。試掘調査の結果、細越館遺跡の計画地は既に削平されていたことを確認し、栄山(3)遺跡の計画地では遺構・遺物等は検出されなかったため、前者を慎重工事、後者を工事中の立会いが必要であると三協運輸に回答した。

また、5月下旬には、上述の駐車場用地造成に伴い水路付替え工事用地およびその隣地である個人敷地内の進入路造成地が栄山(3)遺跡に該当していることが明らかとなった。三協運輸は、平成16年6月7日付けで当委員会を經由して県教育委員会教育長宛に土木工事等のための発掘に関する届出書を提出し、6月21日付け青教文第356号にて同県教育長から事前の発掘調査が必要である旨の回答がなされた。これに前後して当委員会では、三協運輸および個人開発者と協議し平成16年6月11日、6月18日に発掘調査の要否を目的とした試掘調査を実施した。

試掘調査は、両開発予定地（1,229㎡）に任意のトレンチを6地点設定し、重機による掘削及び必要に応じて鉤簾がけを行った。調査面積は209㎡である。

試掘調査の結果、三協運輸側の区域より土坑1基と縄文土器片、個人進入路造成区域より竪穴住居跡1軒や土師器片などを確認したため、三協運輸および個人開発者と協議し、三協運輸側の区域については平成16年7月20日～8月20日の期間で発掘調査を実施することとなった。

発掘調査については三協運輸側の水路付替え工事区域を原因者負担区として、個人進入路造成区域を国庫補助事業区として対応した（第1図下）。

第2節 調査要項

1. 調査目的

水路付替え工事に先立ち、工事予定地内に所在する埋蔵文化財包蔵地の発掘調査を実施し、遺跡の記録保存を行うとともに、地域社会の文化財の活用に資する。

2. 遺跡名及び所在地

栄山(3)遺跡 (青森県遺跡番号 01213)

青森市大字細越字栄山659- 2 外

3. 事業実施期間	平成16年7月8日～平成17年3月31日			
4. 発掘調査期間	平成16年7月20日～平成16年8月20日			
5. 調査面積	820㎡			
6. 調査委託者	三協運輸株式会社 代表取締役 木村 英敬			
7. 調査受託者	青森市			
8. 調査担当機関	青森市教育委員会事務局文化財課			
9. 調査指導機関	青森県教育庁文化財保護課			
10. 予算措置	調査委託者側で措置			
11. 調査体制	調査事務局 青森市教育委員会			
	教 育 長	角田詮二郎	文化財主事	小野 貴之
	教 育 部 長	古山 善猛	"	木村 淳一
	教 育 次 長	最上 進	"	児玉 大成 (調整担当)
	参事文化財課長事務取扱	遠藤 正夫	"	設楽 政健
	文化財課主幹	多田 弘仁	主 事	宮本 大輔 (庶務担当)
	主 査	辻 文子	"	足澤 愛子 (庶務担当)
12. 調査担当者	青森市埋蔵文化財調査員 一町田 工			

第3節 調査方法

グリッドの設定は、平成11年度に青森県埋蔵文化財調査センターの発掘調査で使用していたグリッドを拡張し、調査区内に4m×4mのメッシュを組んだ(第2図左)。グリッド杭の表示は、AA-25(X=88, 196.0, Y=-10, 200.0)を起点とし、北へA、B、C...、南へAB、AC、AD...の順にアルファベットを付し、また東へ24、23、22...、西へ26、27、28...の順に算用数字を付した。各グリッドの呼称は、アルファベットと算用数字を組み合わせて示し、南東角のグリッド杭の名称によるものとした。

調査区域での測量原点は、市立栄山小学校敷地内にある水準点(青2K7 H=25.072m)より移動を行い、AA-25のグリッド杭に標高26.503mの原点を設置した。これを基準として調査区全域に対処するため適宜敷箇所に設置した。

各遺構は、種類別、確認順に遺構番号を付した。遺構精査にあたっては、原則として4分法、2分法を用いることとし、その他必要に応じ土層観察用のベルトを設定した。

遺構の実測図作成においては、平面図、断面図を主体に作成した。実測にあたっては、基本的に簡易通り方測量で行い、縮尺については、原則として20分の1とし、その他必要に応じ10分の1とした。

写真撮影については、土層断面、完掘状況を主体に撮影し、必要に応じ遺物出土状況を撮影した。フィルムは、モノクロームとカラーリバーサルを併用した。

出土遺物の取り上げに関して遺構内出土遺物は、基本的に出土位置を記録し、堆積土の層位毎に取り上げた。遺構外出土遺物は、原則的にグリッド単位で層位毎に一括して取り上げた。

第4節 調査経過

原因者負担区の発掘調査は、国庫補助事業区と併行して実施することとなった。調査は、平成16年7月20日に着手し、重機による表土除去を行い、公共座標に関連付けたグリッド杭を打設した。また、栄山小学校敷地内の水準点より原点移動を行い調査区内に測量原点を設置した。

その後、発掘調査区を縄簾がけし、遺構確認面の精査を行った。

遺構確認および精査は、調査終了日の8月20日まで行い、同日中にすべての作業を終了した。

なお、表土除去や排土移動用の重機、グリッド杭の打設、原点移動および発掘調査に関わる作業員等三協運輸の提供によるものである。

第5節 遺跡の環境

本遺跡が所在する青森市は、北の陸奥湾に面する青森平野とこれを取り囲む、東部の山地、南部に広がる火山性台地、西部の丘陵地からなる。本遺跡は、市内西部の丘陵地の北東端付近に位置し、南北に伸びる遺跡の北端を青森県埋蔵文化財調査センターが平成11年度に東北縦貫自動車建設に伴う発掘調査を実施している。

本発掘調査は、その南側に接する標高17~26m付近の緩斜面に調査区を設定し実施した。

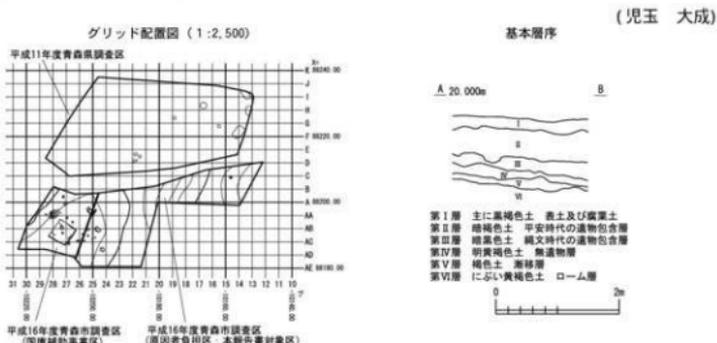
また、本調査区の西側隣地については個人の進入路造成に先立ち国庫補助事業として今回の調査と並行して発掘調査を実施した。

調査前の現状は、かつて行われた黒土の土取り痕が表土上及び試掘調査の段階で広範囲にわたって認められた。

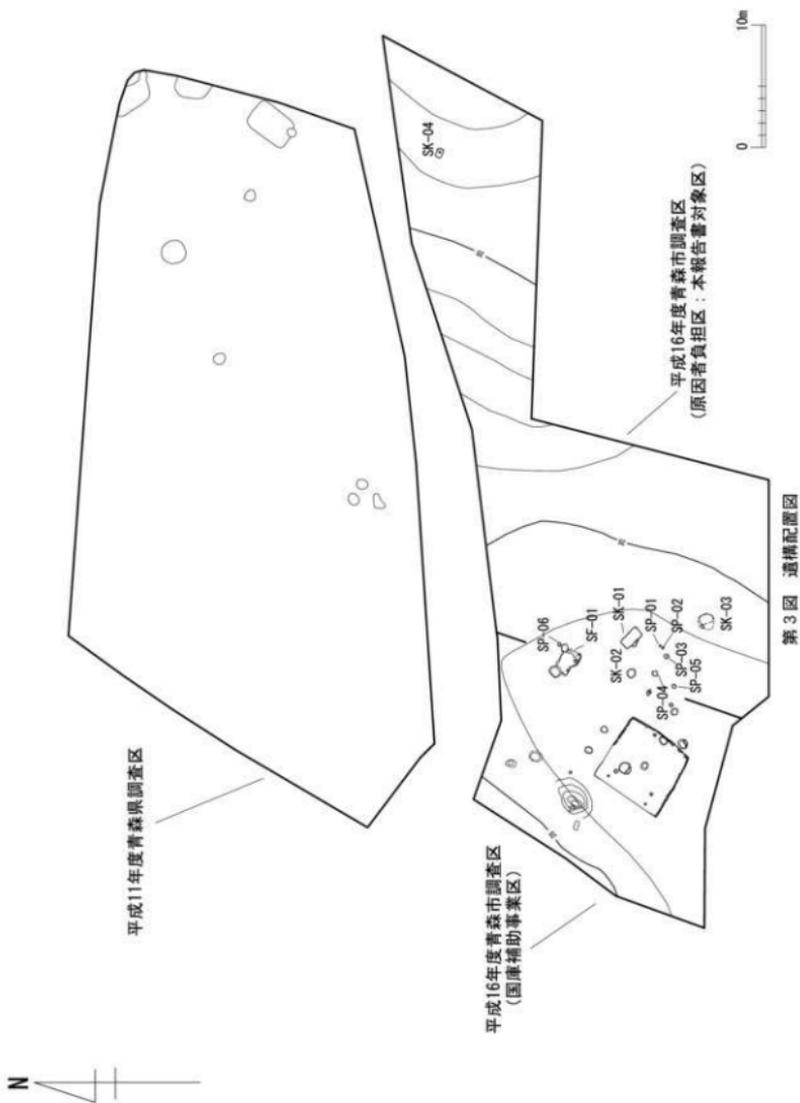
遺跡内の土層（第2図右）は、基本的に6分される層序となっており、第II層が平安時代、第III層が縄文時代に相当し、第IV層以下は無遺物層となっている。

このような基本層序は、市内丘陵地に立地する遺跡では概ね同様の状況で確認されている。

周辺の遺跡については、青森県教育委員会が平成12年度に刊行した報告書「栄山(3)遺跡」に詳述しており、そちらを参照されたい。



第2図 グリッド配置図及び基本層序



第Ⅱ章 検出遺構

第1節 土坑

SK-01 (第4図)

位置 AB・AC-24グリッドで確認した。確認面の標高は26.5mである。

平面 ほぼ楕円形であり重複はない。

断面 底面は比較的平坦で壁面直立気味に立ち上がっている。ただし南東側の一部が張り出している。

規模 開口部長軸178cm、短軸98cm(張り出し部分を含む短軸は117cm)、深さ35cmを計る。西北側壁面には底面から10cm程上方に12cm×24cmの範囲で、壁が被熱して赤色化している部分が認められた(第4図右上)。

堆積土 褐色土・暗褐色土を主体として6層に分層され、全般的に微量もしくは少量の炭化粒を含んでいる。1・2層は自然堆積、3層から6層は人為堆積と思われる。底面直上出土の刀子を覆うように炭の混入範囲が重層的にみられるとともに、焼土層が確認された。なお、2層では縄文土器と土師器が混在し、4層では土師器と須恵器を中心に出土している。

遺物 縄文土器片14点(第8図1~11)、剥片1点、土師器片24点(第9図1~3・5~7)、須恵器1点(第9図4)、刀子1点(第10図7、F-6)等を出土している。

時期 土師器、須恵器等の特徴から10世紀後半の遺構と思われる。

小結 本遺構は、形態や遺構内に見られる壁面の被熱等の状況から、何らかの焼成遺構(例えば土師器など)と考えられるが、堆積状況や遺物の出土状況から後に転用された可能性が高い。

SK-02 (第5図)

位置 AB・AC-25グリッドで確認した。確認面の標高は26.6mである。

平面 ほぼ円形であり重複はない。

断面 底面は比較的平坦で、壁面は緩く外傾して立ち上がる。

規模 開口部径78cm、深さ45cmを計る。

堆積土 微量の炭化物及び少量の焼土が混入している。

遺物 出土遺物なし。

時期 不明である。

SK-03 (第5図)

位置 AD-24グリッドで確認した。確認面の標高は26.2mである。

平面 ほぼ楕円形であり重複はない。

断面 底面は比較的平坦である。壁面の南東側は垂直に立ち上がり、西北側は抉られたようにフラスコ状に立ち上がる。

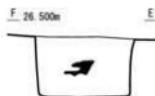
規模 開口部長軸115cm、短軸78cm、坑底部長軸139cm、短軸130cm、深さは45cmを計る。

堆積土 一部攪乱を受けているが自然堆積と思われる。

SK-01

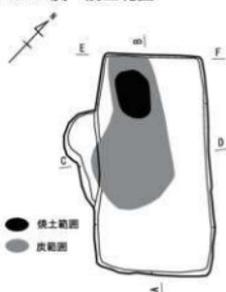


西北側壁面被熱部分

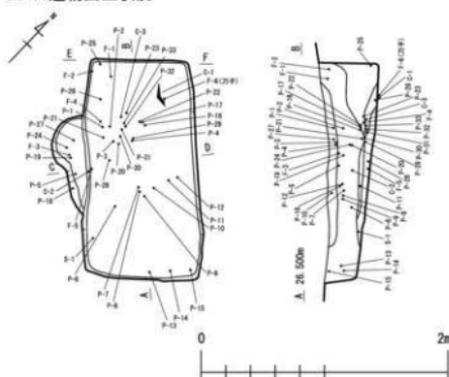


- SK-01
- 第1層 10YR4/4 褐色土 ローム粒(φ0.1~0.5mm)少量、炭化粒(φ0.1~1mm)微量、自然堆積
 - 第2層 10YR4/6 褐色土 ローム粒(φ0.1~1.5mm)少量、炭化粒(φ0.1~0.5mm)少量、自然堆積
 - 第3層 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒(φ0.1~3mm)少量、炭化粒(φ0.1~1.5mm)微量、人為堆積
 - 第4層 10YR3/2 暗褐色土 ローム粒(φ0.1~0.5mm)少量、炭化粒(φ0.1~0.5mm)少量、人為堆積
 - 第5層 7.5YR3/4 暗褐色土 焼土粒(φ0.1~2mm)少量、炭化粒(φ0.1~0.5mm)少量、人為堆積
 - 第6層 7.5YR4/4 褐色土 ローム粒(φ0.1~0.5mm)少量、炭化粒(φ0.1~0.5mm)少量、人為堆積
 - 焼土粒(φ0.1~0.5mm)微量、人為堆積

SK-01炭・焼土範囲



SK-01遺物出土状況



第4図 土坑(SK-01)

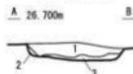
第1表 土坑属性表

遺構番号	位置	重複	規模 (cm)				平面形	断面形	備考
			計測部位	長軸	短軸	深さ			
SK-01	AB-24 AC-24	なし	土坑全体	178	98 (117)	49	楕円形	垂直	()は張り出し部分の計測値、炭範囲(4層)範囲(124×65cm)、焼土(5層)範囲(39×27cm)、壁面の焼土範囲(24×12cm)、出土遺物(P-1-P-33・S-1・C1-C3・F-1-F-5)
SK-02	AB-25 AC-25	なし	土坑全体	78	72	15	円形	緩く外傾	
SK-03	AD-24	なし	土坑全体	115 (139)	78 (130)	45	楕円形	東西垂直、南北方3状	()は坑底部の計測値 P-1-3・S-1-2・F-1
SK-04	D-14	なし	土坑全体	90	54	110	隅丸方形	垂直	
			土坑内小ピット	20	15	24			

SK-02



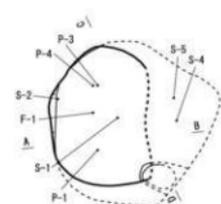
SK-02セクション



SK-02

- 第1層 10YR4/4 褐色土 ローム粒(φ0.1~1.5mm)少量、焼土粒(φ0.1~0.5mm)微量、炭化物微量
 第2層 10YR4/6 褐色土 ローム粒(φ0.1~0.5mm)微量、炭化粒(φ0.1~0.3mm)微量
 第3層 7.5YR5/8 暗褐色土 ローム粒(φ0.1~0.5mm)微量、焼土粒(φ0.1~0.5mm)少量、炭化粒(φ0.1~0.5mm)微量

SK-03



SK-03セクション



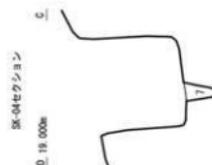
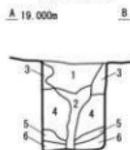
SK-03

- 第1層 10YR4/6 褐色土 にぶい黄褐色(10YR7/3)ブロック(φ1~2m)少量、
 ローム粒(φ0.1~0.5mm)微量、炭化粒(φ0.1~0.5mm)微量、
 焼土粒(φ0.1~0.5mm)微量
 第2層 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒(φ1~1.5mm)少量、炭化粒(φ0.1~0.5mm)少量、
 焼土粒(φ0.1~1mm)微量

SK-04

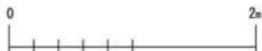


SK-04セクション



SK-04

- 第1層 10YR2/1 黒色土 ローム粒多量、炭化物粒少量、しまりあり、粘・湿性あり
 第2層 10YR2/2 黒褐色土 炭化物粒少量、ローム粒少量、しまりあり、粘・湿性あり
 第3層 10YR3/2 黒褐色土 ロームブロック(φ0.5~2m)中量、ローム粒多量、炭化物粒少量、しまりあり、
 粘・湿性あり
 第4層 10YR2/3 黒褐色土 ローム粒多量、炭化物粒少量、しまりあり、粘・湿性あり
 第5層 10YR3/4 暗褐色土 ロームブロック(φ1~1.5m)少量、炭化物粒少量、しまりあり、粘・湿性あり
 第6層 10YR3/3 暗褐色土 炭化物粒少量、ローム粒少量、しまりあり、粘・湿性あり
 第7層 10YR3/4 暗褐色土 炭化物粒少量、ローム粒中粒、しまりあり、粘・湿性あり



第5図 土坑 (SK-02~04)

遺物 縄文土器片5点(第8図12~16)、石鏃1点(第10図2)が出土している。

時期 不明である。

SK-04(第5図)

位置 D-14グリッドで確認した。舌状に伸びる丘陵の東側斜面に位置し、確認面は標高は18.8mである。

平面 隅丸方形である。

断面 底面は比較的平坦で、壁面は垂直に立ち上がっている。底面のほぼ中央に直径20cm、深さ24cmほどの小穴がみられる。底面に打ち込まれた棒杭の痕跡であり、落とし穴状の遺構と考えられる。

規模 開口部長軸90cm、短軸54cm、深さ約110cmを計る。

堆積土 当初の棒杭が残った状態で自然堆積したものと思われる。

遺物 出土遺物なし。

時期 不明である。

関連 本遺構と同様の落とし穴状の遺構は、平成11年度に青森県埋蔵文化財調査センターの調査区より1基検出されている(青森県教育委員会2001a)。

第2節 小ピット

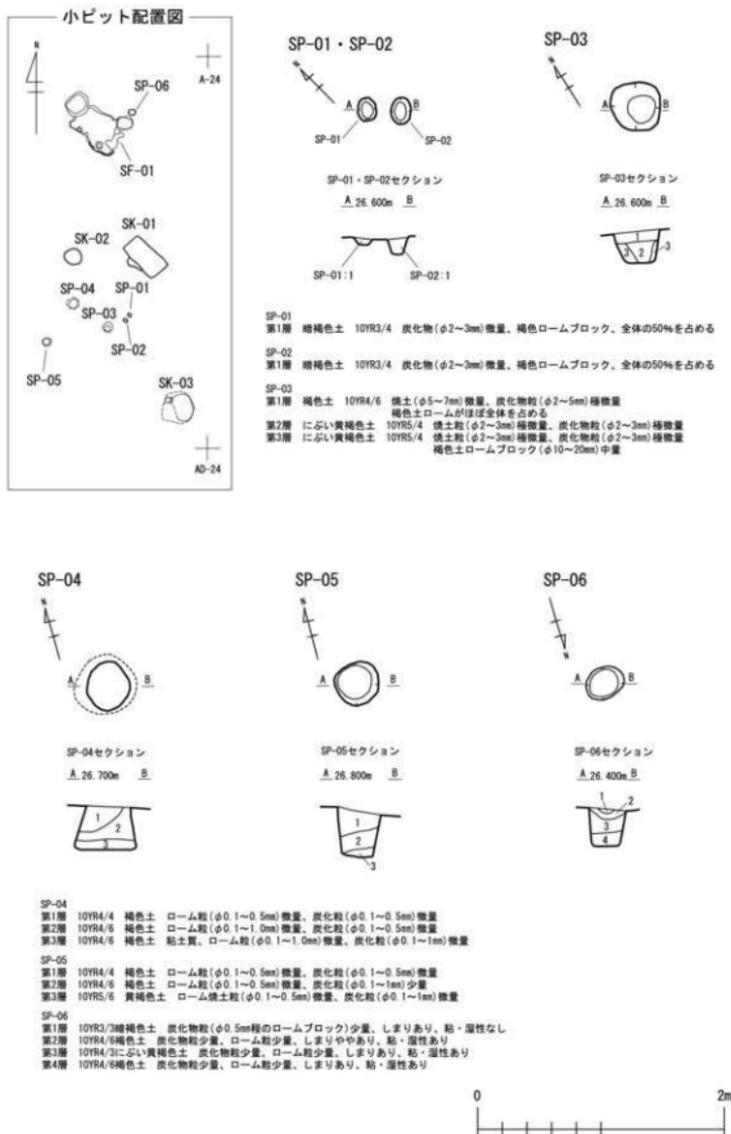
SP-01~SP-06(第6図)

調査の結果、6基の小ピットを検出した。遺構確認面は大部分が攪乱を受けており主に第IV層~V層で遺構を確認した。調査区のAB-25、AC-24~26グリッドの範囲に分布している。周辺に位置するSK-01との関連性は考えにくく、明確な配列を確定できるものもない。遺物が出土しているのはSP-04のみで、縄文時代後期の土器片利用土製品1点(1層、第10図1)出土しているが、遺構の時期を決定するには不十分である。

ここでは、個々のピットについての詳述は割愛し、配置図、実測図、属性表等の掲載にとどめる。

第2表 小ピット属性表

遺構番号	位置	重複	規模(cm)			平面形	断面形	備考
			長軸	短軸	深さ			
SP-01	AC-24	なし	19	15	6	円形	上部傾斜	
SP-02	AC-24	なし	21	17	14	円形	上部傾斜	
SP-03	AC-24 AC-25	なし	40	40	26	円形	垂直	
SP-04	AC-26	なし	40(52)	35(49)	35	円形	フラスコ状	規模の()は坑底部の計測値
SP-05	AC-26	なし	37	34	41	円形	垂直	
SP-06	AB-25	なし	31	26	32	円形	垂直	



第6図 小ピット (SP-01~06)

第3節 焼土遺構

SF-01 (第7図)

位置・確認 AA-25・AB-25グリッドに位置する。遺構確認面は、大部分が攪乱を受けており第V層上面で本遺構確認した。国庫補助事業区SK-07土坑と重複しているが、本遺構の方が古いものである。

平面・断面 不整形長方形を呈しており、底面は比較的平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。また本遺構の南西部分の焼土や、SF01-sk01を含め、一体として使用されたのではないと思われる。

規模 長軸226cm 短軸160cmを計る。不整形の焼土は79cm×52cmを計り、その長軸西側には炭化粒や、焼土粒を含む層が広がっている。さらにその焼土北側に、sk01とした69cm×56cmの楕円形の土坑を検出し、西側の若干離れた壁際にピット2基を検出した。pit1は28cm×26cmの長方形、pit2は20cm×20cmのほぼ方形を呈する。

堆積土 焼土は4層(1・3・4・5層)に分層した。各層とも全般に炭化粒と焼土粒を含んでいる。特に、1層、3層は炭化粒と焼土粒が多量に混入している。

遺物 本遺構のほぼ中央上面からは土器器襖胴部片1点、また、pit1付近から石棒1点(第10図3)、さらに、pit2付近から土器器襖胴部片2点が出土している。焼土とsk01土坑の間から須恵器片1点(五所川原須恵器窯跡前田野目支群)が出土している(P3、第9図9)。この須恵器は、長頸壺と考えられ、ナデ調整された肩部から胴部にかけての破片である。sk01の南壁側付近からは須恵器を模倣した黒色処理の小形壺土器(第9図8)が出土している(P4・P5)。また、焼土から礫の焼け石片2点が出土している。

覆土からは土器器片7点が出土し、うち1点は口縁部が外反し、ロクロ調整した後に外面胴部はケズリ、内面胴部は横ナデ調整されており(第9図10)、他は胴部細片である。そのほか第9図8と類似した黒色処理の小形壺土器片が4点出土している。同じく覆土からは5～8cmの礫焼け石3点が出土している。

遺構上面からは、刀身部分(F-1)が5分の1程度残存した刀子が出土している(第10図8)。

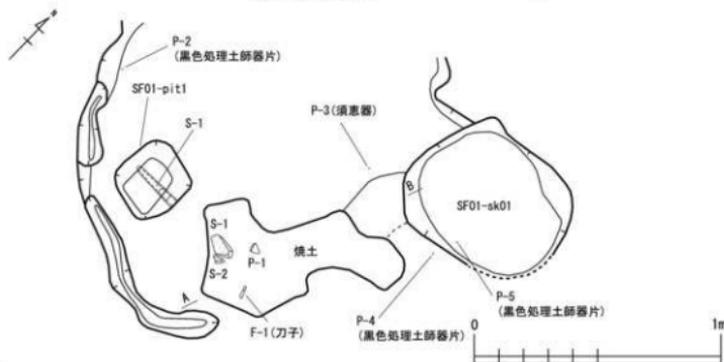
時期 本遺構の出土遺物や重複している国庫補助事業区のSK-07出土遺物等の関係から10世紀後半のものと考えられる。

(一町田 工)

第3表 焼土遺構属性表

遺構番号	位置	重複	規模 [cm]			平面形	断面形	備 考	
			計測部位	長軸	短軸				深さ
SF-01	AA-25 AB-25	SF-01 > 国補SK-07	焼土遺構全体	226	160	19	不整形長方形	垂直に立ち上がる	出土遺物 (P-2～P-5)、焼土範囲 (79×52cm) の出土遺物 (P-1・S-1, S-2, F-1)
			焼土遺構内sk-01	69	56	34	楕円形	垂直	
			焼土遺構内pit1	28	26	52	隅丸方形	垂直	出土遺物 (S-1)
			焼土遺構内pit2	20	20	26	隅丸方形	上部斜傾	

SF-01及び遺物出土状況



SF-01

- 第1層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 炭化物(φ5~20mm)多量、焼土粒少量、ロームブロック(φ2~15cm)中量、ローム粒少量、しまりあり、粘・湿性なし
- 第2層 10YR4/4 褐色土 炭化物(φ2~5mm)少量、焼土粒少量、しまりあり、粘・湿性なし
- 第3層 7.5YR2/4 暗褐色土 炭化物粒中量、焼土粒2.5YR4/6赤褐色土)中量、しまりあり、粘・湿性なし
- 第4層 2.5YR4/6 赤褐色土 炭化物粒少量、しまりあり、粘・湿性なし
- 第5層 7.5YR4/6 褐色土 炭化物粒少量、焼土粒少量、しまりかなりあり、粘・湿性なし

SF01-sk01

- 第1層 10YR5/6 黄褐色土 炭化物粒少量、ロームブロック(φ4~5cm)中量、焼土粒微量、しまりあり、粘・湿性あり
- 第2層 10YR4/4 褐色土 炭化物粒少量、ロームブロック(φ5~10cm)少量、しまりややあり、粘・湿性あり

SF01-pit1・pit2

- 第1層 10YR4/3 にぶい黄褐色土 しまりあり、粘・湿性なし、焼土ブロック(φ0.5~2cm)中量、ロームブロック(φ0.5~1cm)中量、焼土ブロック(φ5~6cm)少量

第7図 焼土遺構 (SF-01)

第三章 出土遺物

本調査で出土した遺物は、土器、石器等合わせてダンボール約2箱分である。

第1節 縄文土器(第8図)

1. 縄文時代前期の土器

A. 円筒下層b式に相当する口縁部土器片(第8図17)

平口縁で地文としてLR縄文を施し、その上に口縁と平行して二条の燃糸圧痕のある土器である。

B. 円筒下層d1式に相当する口縁部土器片(第8図18)

口縁部文様帯は2.5cmと狭い。口縁と平行・垂直に燃糸を押圧し、胴部にはRLの斜縄文を施した土器である。

2. 縄文時代中期の土器

A. 円筒上層a式に相当する口縁部土器片(第8図19)

太い粘土紐を貼り付け、その上にLRの燃糸圧痕のある土器である。

B. 中の平3式に相当する口縁部土器片(第8図20)

平口縁で地文にLR縄文を施したものと、口縁が波状で地文RL縄文を施した土器である。

3. 縄文時代後期初頭の土器

十腰内I式土器直前の土器に相当する口縁部土器片(第8図21~35)

文様が磨消縄文・沈線と地文が縄文の土器や、沈線・貼付文・磨消縄文等で、沈線文様を多く施文している土器片などである。

第2節 土師器・須恵器(第9図)

SK-01を中心に土師器残片が若干出土し、須恵器残片は数点のみである。土師器残片では口縁が〔く〕の字状に外反し、頸部から上は輪積成形のものが多く、ロクロ成形したものもあるが、口縁部を短くつまみ出し、外面に段を有しているものも見られた。

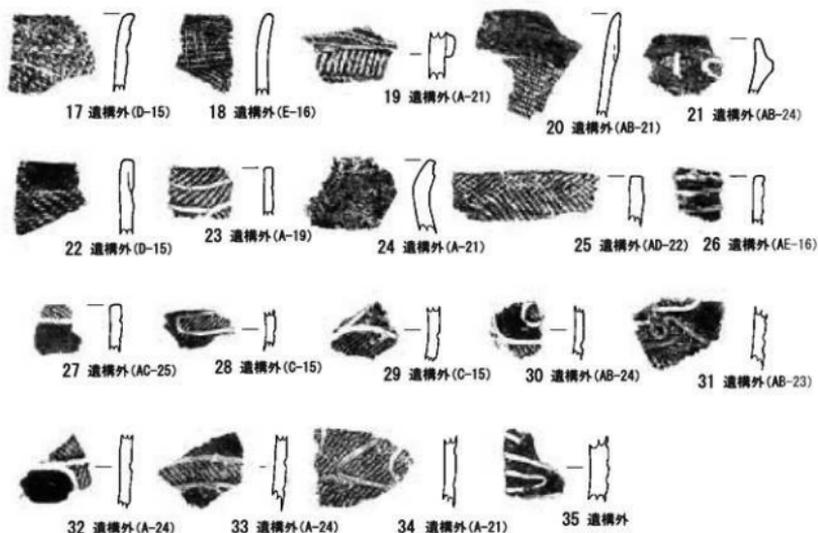
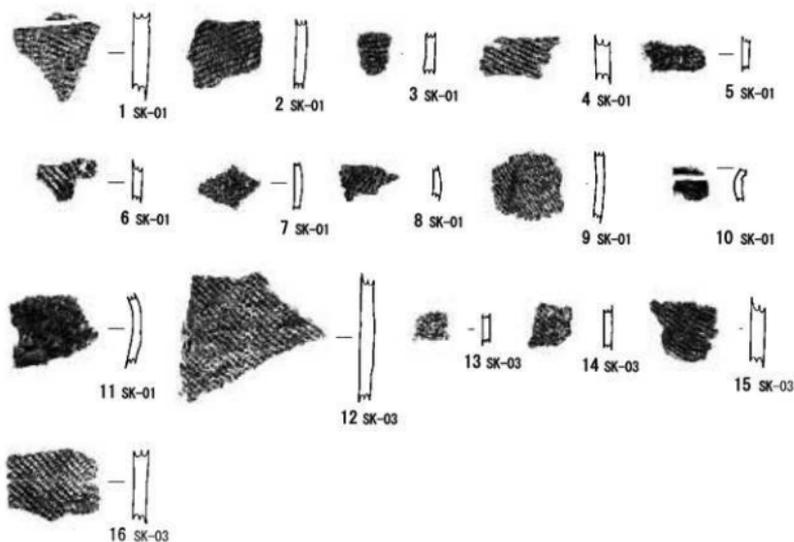
須恵器では残片が出土し、坏片はなく、須恵器を模倣した黒色処理の小形壺土師器片がみられるなど、須恵器生産の終末期の様相を呈する10世紀後半のものと思われる。

第3節 土製品(第10図1)

SP-04の覆土から土器片利用土製品(円形)1点出土している。縄文時代後期の土器片を利用したものである。

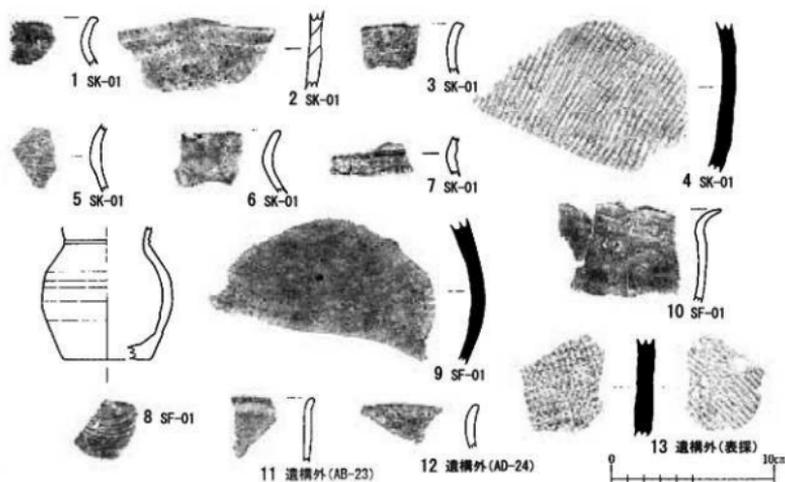
第4節 石器(第10図2~6)

石器は5点出土し、遺構に伴うものとしてはSK-03出土のより石鎌1点(2)とSF-01出土の石棒1点(3)の2点である。遺構外では、敲石1点(6)、砥石1点(5)、石棒1点(4)、剥片26点が出土している。



第8圖 縄文土器

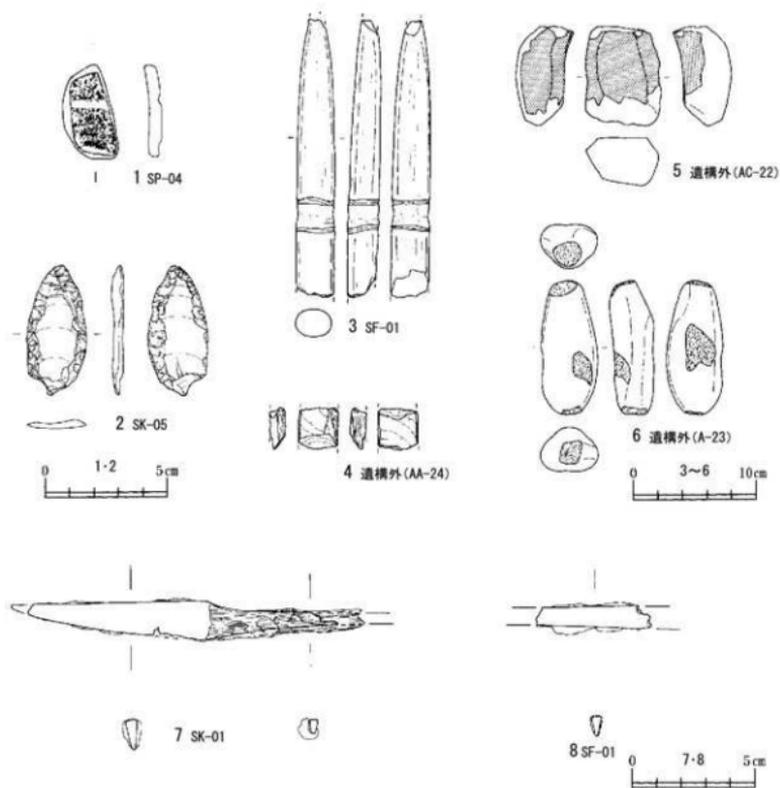




第9図 土師器・須恵器

第4表 出土土器属性表(1)

図版番号	出土遺構	遺物番号	層位	種別	器種・部位	文様	内面調整	焼成	備考
第8図1	SK-01	P.1 (第4段)	2	縄文土器	深鉢・胴部	華部LR	ナデ	良	中期末葉
第8図2	"	P.2 (")	2	縄文土器	深鉢・胴部	華部LR	ナデ	良	灰化物付着・中期末葉
第8図3	"	P.3 (")	2	縄文土器	深鉢・胴部	華部LR	ナデ	良	中期末葉
第8図4	"	P.4 (")	2	縄文土器	深鉢・胴部	華部LR	ナデ	良	中期末葉
第8図5	"	P.7 (")	2	縄文土器	深鉢・胴部	華部LR	ナデ	良	灰化物付着・中期末葉
第8図6	"	P.10 (")	2	縄文土器	胴部	華部LR	ナデ	良	中期末葉
写真3 非1	"	P.12 (")	2	縄文土器	底部	-	-	良	-
第8図7	"	P.13 (")	2	縄文土器	浅鉢・胴部	華部LR	ナデ	良	灰化物付着・中期末葉
第8図8	"	P.17 (")	2	縄文土器	浅鉢・胴部	華部LR	ナデ	良	中期末葉
第8図9	"	P.18 (")	1	縄文土器	浅鉢・胴部	華部LR	ナデ	良	中期末葉
第8図10	"	P.20 (")	2	縄文土器	壺・胴部	沈線	ナデ	良	灰化物付着・中期末葉
第8図11	"	P.28 (")	4	縄文土器	壺・胴部	LR	ナデ	やや良	灰化物付着・中期末葉
第9図1	"	P.5 (")	2	土師器	口縁部	ロクロナデ	ナデ	良	-
写真3 非2	"	P.6 (")	2	土師器	脛・胴部	ハケメ	ハケメ	良	-
写真3 非3	"	P.8 (")	2	土師器	杯	ロクロナデ	ロクロナデ	良	-
写真3 非4	"	P.9 (")	2	土師器	脛・胴部	ロクロナデ	ナデ	良	-
写真3 非5	"	P.11 (")	6	土師器	脛・胴部	ヘラクズリ	ナデ	良	-
第9図2	"	P.14 (")	2	土師器	脛	ロクロナデ	ハケメ	良	登上げ成形
第9図3	"	P.15 (")	2	土師器	壺・口縁部	ロクロナデ	ナデ	良	-
写真3 非6	"	P.16 (")	2	土師器	脛	ヘラクズリ	ナデ	良	-
第9図5	"	P.19 (")	2	土師器	胴部	ハケメ	ナデ	良	-
写真3 非7	"	P.21 (")	2	土師器	脛・胴部	ヘラクズリ	ナデ	良	-
写真3 非8	"	P.22 (")	2	土師器	脛・胴部	ロクロナデ	ナデ	やや良	-
写真3 非9	"	P.23 (")	2	土師器	脛・胴部	ロクロナデ	ナデ	やや良	黒色処理
写真3 非10	"	P.24 (")	2	土師器	脛・胴部	ハケメ	ナデ	やや良	-
写真3 非11	"	P.25 (")	4	土師器	脛・胴部	ロクロナデ	ナデ	やや良	灰化物付着
第9図6	"	P.27 (")	2	土師器	口縁部	ロクロナデ	ナデ	やや良	-
写真3 非12	"	P.29 (")	4	土師器	脛・胴部	ヘラクズリ	ナデ	やや良	-
写真3 非13	"	P.30 (")	4	土師器	脛・胴部	ヘラクズリ	ナデ	やや良	-
第9図7	"	P.31 (")	4	土師器	脛・胴部	ロクロナデ	ナデ	やや良	黒色処理
写真3 非14	"	P.32 (")	4	土師器	脛・胴部	ヘラクズリ	ナデ	良	-
写真3 非15	"	P.33 (")	4	土師器	壺・胴部	ロクロナデ	ナデ	良	黒色処理
第9図4	"	P.26 (")	4	須恵器	脛・胴部	タタキ	ナデ	やや良	-



第10図 土製品・石器・鉄製品

ただし、砥石（5）については平安時代のもと考えられる。

第5節 鉄製品(第10図7・8)

刀子2点が出土している。1点はSK-01底面からほぼ完形に近い状態で出土し、柄の木部の一部も若干残存している（7）。他の1点は焼土SF-01から出土し、5分の1程度残存する刀身部分である（8）。

（一町田 工）

第5表 出土土器属性表(2)

図版番号	出土遺構	遺物番号	層位	種別	器種・部位	文様	内面調整	焼成	備考
第8図12	SK-03	P-1 (第5図)	2	縄文土器	胴部	華部丸	ナデ	良	中期末葉
第8図13	"	P-2 (")	"	縄文土器	胴部	華部丸	ナデ	やや良	中期末葉
第8図14	"	P-3 (")	"	縄文土器	胴部	華部丸	ナデ	やや良	中期末葉
第8図15	"	"	覆土	縄文土器	胴部	華部丸	ナデ	良	中期末葉
第8図16	"	"	"	縄文土器	胴部	華部丸	ナデ	良	中期末葉
第9図8	SF-01	P-4 5(第7図)	1・2	土師器	蓋	口ク口ナデ	ナデ	良	黒色処理
第9図9	"	P-3 (")	1	須恵器	長頸壺	口ク口ナデ	ナデ	良	
第9図10	"	"	覆土	土師器	椀・口縁部	ヘラクズリ	ナデ	良	
第8図17	遺構外(D 15)	"	II	縄文土器	深鉢・口縁部	口縁、二条の惣糸任履地文LR	ナデ	良	円筒下層b式
第8図18	遺構外(E 16)	"	"	縄文土器	深鉢・口縁部	口縁、並行、垂直惣糸任履、地文RL	ナデ	良	円筒下層b式
第8図19	遺構外(AB 22)	"	"	縄文土器	深鉢・口縁部	貼付隆帯L押圧による別目	ナデ	良	円筒上層a式
第8図20	遺構外(AB 21)	"	III	縄文土器	深鉢・口縁部	折り返し波状口縁、地文RL	ナデ	良	中期末葉 中の平式
第8図21	遺構外(AB 24)	"	II	縄文土器	深鉢・口縁部	沈線	ナデ	良	中期末葉
第8図22	遺構外(D 15)	"	"	縄文土器	深鉢・口縁部	沈線	ナデ	良	中期末葉
第8図23	遺構外(A 19)	"	"	縄文土器	口縁部	沈線、地文LR	ナデ	良	中期末葉
第8図24	遺構外(A 21)	"	"	縄文土器	口縁部	口唇部惣糸任履、無文	ナデ	良	中期末葉
第8図25	遺構外(AD 22)	"	III	縄文土器	口縁部	口縁平縁、異なる原体を施文	ナデ	良	中期末葉
第8図26	遺構外(AE 16)	"	II	縄文土器	口縁部	口縁平縁、沈線	ナデ	良	中期末葉
第8図27	遺構外(AC 25)	"	"	縄文土器	口縁部	口縁平縁、沈線、磨消縄文	ナデ	良	中期末葉
第8図28	遺構外(C 15)	"	"	縄文土器	胴部	沈線・磨消縄文	ナデ	良	中期末葉
第8図29	遺構外(C 15)	"	"	縄文土器	胴部	沈線・磨消縄文	ナデ	良	中期末葉
第8図30	遺構外(AB 24)	"	"	縄文土器	胴部	沈線・磨消縄文	ナデ	良	中期末葉
第8図31	遺構外(AB 24)	"	"	縄文土器	胴部	沈線・磨消縄文	ナデ	良	中期末葉
第8図32	遺構外(A 24)	"	"	縄文土器	胴部	沈線・磨消縄文	ナデ	良	中期末葉
第8図33	遺構外(A 24)	"	"	縄文土器	胴部	沈線・磨消縄文	ナデ	良	中期末葉
第8図34	遺構外(A 21)	"	"	縄文土器	胴部	沈線・磨消縄文	ナデ	良	中期末葉
第8図35	遺構外(不詳)	"	III	縄文土器	胴部	沈線	ナデ	良	後期初頭
第9図11	遺構外(AB 23)	"	"	土師器	口縁部	口ク口ナデ	ナデ	良	
第9図12	遺構外(AD 24)	"	IV	土師器	口縁部	口ク口ナデ	ナデ	良	
第9図13	遺構外(不詳)	"	III	須恵器	胴部	タタキ	タタキ	良	

第6表 出土土製品属性表

図版番号	出土遺構	遺物番号	層位	種別	器種・部位	文様	内面調整	焼成	備考
第10図1	SP-04	P-1	1	土器片利用土製品	胴部片を利用	沈線	ナデ	やや良	円形

第7表 出土石器属性表

図版番号	出土遺構	遺物番号	層位	種別	計測値				石質	備考
					長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)		
第10図2	SK-03	S-1	1	石錘	53	24	5	6.2	輝緑凝灰岩	
第10図3	SF-01	S-1	II 覆土上層	石棒	(227)	(31)	(25)	265.5	輝緑凝灰岩	
第10図4	遺構外(AA 24)	"	II	石棒破片	(34)	(32)	(13)	19.3	粘板岩	
第10図6	遺構外(AC 22)	"	III	耐石・凹石	109	46	36	223.6	安山岩	
第10図5	遺構外(A 23)	"	"	砥石	81	61	47	274.2	石炭安山岩	

第8表 出土鉄製品属性表

図版番号	出土遺構	遺物番号	層位	種別	計測値				備考
					長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	
第10図7	SK-01	F-6(第4図)	5	刀子	137	13	9	16.8	柄木部若干残存
第10図8	SF-01	F-1(第7図)	上面	刀子	47	13	5	4	刀身5分1残存

ま と め

本遺跡の一部は、東北縦貫自動車道八戸線建設事業に先立ち、既に平成11年度に青森県埋蔵文化財調査センターが調査を実施し、平成12年度刊行の「栄山(3)遺跡 青森県埋蔵文化調査報告書第294集」として報告されている。本年度の発掘調査は、その調査区に隣接する地区を対象とし、原因者負担区と国庫補助事業区に2分して発掘調査を実施した。本報告書は、そのうちの原因者負担区820㎡の調査結果についてまとめたものである。

本発掘調査では、縄文時代前期から中期、後期初頭、平安時代の土器が出土し、他に石器5点、土製品(土器片利用土製品)1点、鉄製品(刀子)2点などが出土している。

遺物は遺構外からのものが多く、縄文時代前期、中期の土器が若干出土し、中期末から後期初頭の土器がより多く出土している。個々の土器については先に触れているので、ここでは土師器・須恵器の特徴的なことについて簡単に述べることとする。

土師器では量的に少く、甕の口縁部が「く」の字状に外反するものや口縁の幅が短くつまみ出されるものなどがみられる。須恵器では五所川原須恵器窯跡前田野目支群のものが出土しており、須恵器を模倣したと思われる黒色処理した小形壺土師器も出土している。この黒色処理土師器は五所川原須恵器窯跡の生産停止した終末期の様相を示すものと考えられる。以上の特徴は、10世紀後半の土師器・須恵器の標識とされる浪岡町大沼遺跡、源常平遺跡の一部などとも共通するものである。

遺構は平安時代の焼成遺構と考えられる土坑1基(SK-01)、縄文時代の落とし穴と考えられる土坑1基を含む4基の土坑をはじめ、小ピット6基、焼土遺構1基を検出した。

焼成遺構(SK-01)については、青森市朝日山(3)遺跡(青森県教育委員会1995)や野木遺跡(青森市教育委員会1998)で検出されている土坑内の一部が被熱し、炭化物の多い層や焼土などを含む層を有する点など類似している。本遺構は出土物から推察すると、10世紀後半の時期に構築・使用されたものと考えられる。

縄文時代の落とし穴については、平成11年度に県で実施した調査区(青森県教育委員会2001)より検出されているが、本調査でも丘陵の縁辺部でほぼ同様の標高約19mの位置に1基検出した。本遺構もまた底面のほぼ中央に打ち込まれた棒杭の痕跡が認められる。

小ピット6基のうちSP-04のみから縄文後期の土器片利用土製品が出土しているが、いずれの小ピットも時期は不明である。

焼土遺構はSF-01の1基であるが、その位置的關係から国庫補助事業区SK-07の土坑に跨る状況で検出されている。焼土中には石英質が多く含まれる土坑や、焼土範囲北側の土坑(SF01-sk01)、南側2基の小ピット(SF01-pit1・2)との関連など総合的な視点からさらに検討することが求められる。

また、平成11年度の県調査分および本年度実施した国庫補助事業区の調査成果を合せてみた場合、本遺跡は遅くとも縄文前期から縄文後期まで断続的に使用され、平安時代には竪穴住居跡や土坑、焼土遺構などから構成される集落が営まれていたことが確認された。以上のことから本遺跡は、南北に延びる丘陵上や、隣接する細越館遺跡の位置する丘陵などに同時期の遺構や遺物が広がる可能性が十分に考えられる。

最後に、本報告書を刊行するにあたり、調査委託者である三協運輸株式会社をはじめ、周辺土地所有者や関係機関・諸氏のご指導、ご協力に対しまして深く感謝の意を表する次第であります。



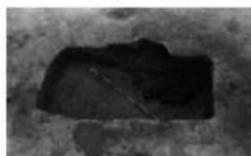
遠景 (N→)



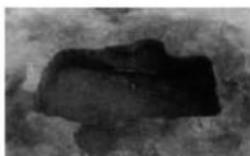
遠景 (E→)



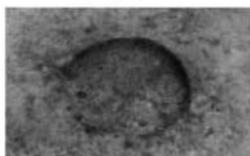
遠景 (W→)



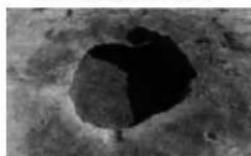
SK-01 焼土検出範囲 (NE→)



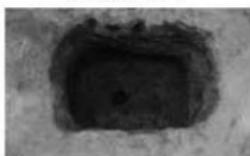
SK-01 完掘 (N→)



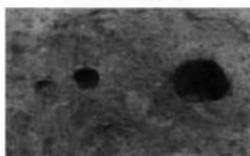
SK-02 完掘 (S→)



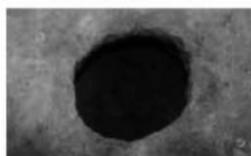
SK-03 完掘 (N→)



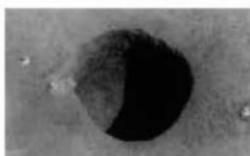
SK-04 完掘 (N→)



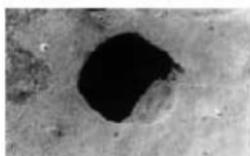
左からSP-01~03 完掘 (N→)



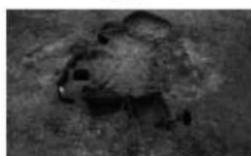
SP-04 完掘 (S→)



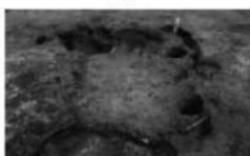
SP-05 完掘 (S→)



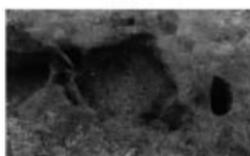
SP-06 完掘 (N→)



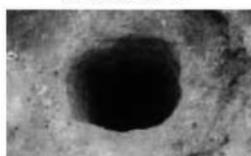
SF-01 完掘 (E→)



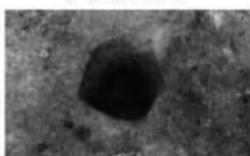
SF-01 完掘 (W→)



SF01-sk01 完掘 (E→)



SF01-pit1 完掘 (W→)



SF01-pit2 完掘 (W→)



SF-01 石棒 (S-1) 出土状況 (S→)

写真1 検出遺構等



写真2 出土遺物(1)



写真3 出土遺物(2)

報 告 書 抄 録

ふりがな	さかえやま (3) いせきはくつちょうさほうこくしょ							
書名	栄山(3) 遺跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第76集							
編著者名	一町田工、児玉大成							
編集機関	青森市教育委員会							
所在地	〒030-8555 青森県青森市中央一丁目22-5 017-734-1111							
発行年月日	西暦2005年3月8日							
ふりがな	ふりがな	コード	日本測地系 (Tokyo Datum)		調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯				東経
2010中世 栄山(3) 遺跡	青森県青森市 細越字栄山	02201	213	40° 47' 59"	140° 56' 49"	20040720	820m ²	民間事業 (水路付替 え工事)に 係る事前調 査
				世界測地系 2000(J GD2000)				
				40° 47' 49"	140° 57' 02"			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
栄山(3) 遺跡	集落跡	縄文時代 平安時代	土坑 4基 小ビット 6基 焼土遺構 1基		土器(縄文前期～後期) 土師器(平安時代) 須臾器(平安時代) 土製品(土器片利用土製品) 石器(石鏃・石棒ほか) 鉄製品(刀子)			

引用・参考文献

- | | |
|--|--|
| <p>青森県教育委員会 1976 泉山遺跡発掘調査報告書 青森県埋蔵文化財調査報告書第31集</p> <p>青森県教育委員会 1978 三内沢部遺跡発掘調査報告書 青森県埋蔵文化財調査報告書第41集</p> <p>青森県教育委員会 1978 源常平遺跡発掘調査報告書 青森県埋蔵文化財調査報告書第39集</p> <p>青森県教育委員会 1989 「中世の城館」 青森市の歴史</p> <p>青森県教育委員会 1992 富ノ沢(2)遺跡VI墓ノ沢(3) 青森県埋蔵文化財調査報告書第14集</p> <p>青森県教育委員会 1995 泉山遺跡発掘調査報告書 青森県埋蔵文化財調査報告書第181集</p> <p>青森県教育委員会 1995 朝日山(3)遺跡発掘調査報告書 青森県埋蔵文化財調査報告書第167集</p> <p>青森県教育委員会 1995 山元(2)遺跡発掘調査報告書 青森県埋蔵文化財調査報告書第171集</p> <p>青森県教育委員会 1998 高屋敷館遺跡発掘調査報告書 青森県埋蔵文化財調査報告書第243集</p> <p>青森県教育委員会 1999 野木遺跡II 青森県埋蔵文化財調査報告書第264集</p> <p>青森県教育委員会 2001a 栄山(3)遺跡 青森県埋蔵文化財調査報告書第294集</p> <p>青森県教育委員会 2001b 安田(2)遺跡 青森県埋蔵文化財調査報告書第303集</p> <p>青森県教育委員会 2003 野尻(1)遺跡V 青森県埋蔵文化財調査報告書第351集</p> | <p>青森市教育委員会 1998 野木遺跡発掘調査報告書 青森県埋蔵文化財調査報告書第38集</p> <p>青森市教育委員会 2002 大矢沢野田(1)遺跡発掘調査報告書 青森市埋蔵文化財調査報告書第61集</p> <p>青森市教育委員会 2003 深沢(3)遺跡発掘調査報告書 青森市埋蔵文化財調査報告書第67集</p> <p>大府府立弥生文化博物館 2004 「三・四世紀の倭人社会」 大和文庫と渡来人 平成16年秋季特別展大府府立弥生文化博物館図録30</p> <p>工藤 清季 2004 「浪岡町の古代遺跡」 浪岡町史第1巻 浪岡町</p> <p>潮見 浩 1988 図解技術の考古学 有斐閣</p> <p>望月 精司 1997 「土師器焼成坑の分類」 古代の土師器生産と焼成遺構 真隆社</p> <p>山道 紀郎 1980 「細越館遺跡」 日本城郭大系 2 青森・岩手・秋田 新人物往來社</p> <p>鈴木 克彦 1998 「東北地方北部の縄文中期後半の土器」 研究紀要 第3号 青森県埋蔵文化財調査センター</p> <p>浪岡町 1995 羽黒平(3)遺跡発掘 試掘 調査報告書 浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書第5集</p> <p>浪岡町教育委員会 1990 大沼遺跡発掘調査報告書 浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書第4集</p> <p>成田 温彦 1994 「青森県の土器」 縄文文化の研究4 雄山閣出版</p> <p>山内 清男 1979 日本先史土器の編成 先史考古学会</p> <p>村越 潔 1974 円筒土器文化 雄山閣出版</p> |
|--|--|

既刊埋蔵文化財関係報告書一覧

青森市の文化財	1962 『三内遺跡発掘調査概報』	※ 第41集	1998 『野木遺跡発掘調査概報』
※ 2	1965 『四ツ石遺跡調査概報』	※ 第42集	1998 『熊沢遺跡発掘調査概報』
※ 3	1967 『玉清木遺跡調査概報』	※ 第43集	1999 『市内遺跡詳細分布調査報告書』
※ 4	1970 『三内丸山遺跡調査概報』	※ 第44集	1999 『萩野(2)遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
※ 5	1971 『野木和道跡調査報告書』	※ 第45集	1999 『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
※ 6	1971 『玉清木Ⅲ遺跡発掘調査報告書』	※ 第46集	1999 『新町野・野木遺跡発掘調査概報』
※ 7	1971 『大浦遺跡調査報告書』	※ 第47集	1999 『稲山遺跡発掘調査概報』
※ 8	1973 『市内遺跡発掘調査報告書』	※ 第48集	2000 『熊沢遺跡発掘調査報告書』
	1979 『鹿沢遺跡』	※ 第49集	2000 『稲山遺跡発掘調査概報Ⅱ』
	1983 『四ツ橋遺跡調査報告書』	※ 第50集	2000 『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅴ』
青森市の埋蔵文化財	1983 『山形峠遺跡』	※ 第51集	2000 『塚家(1)・菅谷山吹(3)遺跡発掘調査報告書』
※	1985 『長森遺跡発掘調査報告書』	※ 第52集	2000 『大矢沢野田(1)遺跡調査報告書』
※	1986 『田茂木野遺跡発掘調査報告書』	※ 第53集	2000 『市内遺跡発掘調査報告書』
※	1987 『横内城跡発掘調査報告書』	※ 第54集	2001 『市内遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
※	1988 『三内丸山Ⅰ遺跡発掘調査報告書』	※ 第55集	2001 『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
青森市埋蔵文化財調査報告書		※ 第56集	2001 『稲山遺跡発掘調査報告書Ⅰ』
※ 第16集	1991 『山吹(1)遺跡発掘調査報告書』	※ 第57集	2001 『稲山遺跡発掘調査概報Ⅲ』
※ 第17集	1992 『埋蔵文化財出土遺物調査報告書』	※ 第58集	2001 『大矢沢野田(1)遺跡発掘調査概報Ⅱ』
※ 第18集	1993 『三内丸山(2)遺跡発掘調査概報』	※ 第59集	2001 『市内遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
※ 第19集	1993 『市内遺跡発掘調査報告書』	※ 第60集	2002 『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
※ 第20集	1993 『小牧野遺跡発掘調査概報』	※ 第61集	2002 『大矢沢野田(1)遺跡発掘調査報告書』
※ 第21集	1994 『市内遺跡詳細分布調査報告書』	※ 第62集	2002 『稲山遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
※ 第22集	1994 『三内遺跡発掘調査報告書』	※ 第63集	2002 『稲山遺跡発掘調査概報Ⅳ』
※ 第23集	1994 『三内丸山(2)・小三内遺跡発掘調査報告書』	※ 第64集	2002 『市内遺跡発掘調査報告書』
※ 第24集	1995 『横内遺跡・横内(2)遺跡発掘調査報告書』	※ 第65集	2003 『菅谷山吹(4)～(7)遺跡発掘調査報告書』
※ 第25集	1995 『市内遺跡詳細分布調査報告書』	※ 第66集	2003 『稲山遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
※ 第26集	1995 『塚家(2)遺跡発掘調査報告書』	※ 第67集	2003 『深沢(3)遺跡発掘調査報告書』
※ 第27集	1996 『塚家(1)遺跡発掘調査概報』	※ 第68集	2003 『近野遺跡発掘調査報告書』
※ 第28集	1996 『三内丸山(2)遺跡発掘調査報告書』	※ 第69集	2003 『市内遺跡発掘調査報告書Ⅰ』
※ 第29集	1996 『市内遺跡詳細分布調査報告書』	※ 第70集	2003 『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
※ 第30集	1996 『小牧野遺跡発掘調査報告書』	※ 第71集	2004 『稲山遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
※ 第31集	1997 『市内遺跡詳細分布調査報告書』	※ 第72集	2004 『稲山遺跡発掘調査報告書Ⅴ』
※ 第32集	1997 『塚家(1)遺跡発掘調査概報Ⅱ』	※ 第73集	2004 『新町野遺跡発掘調査概報』
※ 第33集	1997 『新町野遺跡発掘調査報告書』	※ 第74集	2004 『市内遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
※ 第34集	1997 『萩野(2)遺跡発掘調査報告書』	※ 第75集	2004 『江波遺跡発掘調査報告書』
※ 第35集	1997 『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅱ』	※ 第76集	2005 『堂山(3)遺跡発掘調査報告書』
※ 第36集	1998 『塚家(1)遺跡発掘調査報告書』	※ 第77集	2005 『赤坂遺跡発掘調査報告書』
※ 第37集	1998 『新町野遺跡発掘調査報告書』	※ 第78集	2005 『三内丸山(8)遺跡発掘調査報告書』
※ 第38集	1998 『野木遺跡発掘調査報告書』	※ 第79集	2005 『市内遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
※ 第39集	1998 『市内遺跡詳細分布調査報告書』	※ 第80集	2005 『合子沢松森(2)遺跡発掘調査概報』
※ 第40集	1998 『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅲ』	※ 第81集	2005 『石江遺跡発掘調査概報』

青森市埋蔵文化財調査報告書第76集

堂山(3)遺跡発掘調査報告書

発行年月日 平成 17 年 3 月 8 日

発行 青森市教育委員会
〒030-8555 青森市中央一丁目22-5
TEL 017-734-1111

印刷 青森コ口ニ一印刷
〒030-0943 青森市幸畑字松元62-3
TEL 017-738-2021